

六 方言副詞語彙の研究

(——今回の「瀬戸内海域島嶼の副詞語彙の調査」に寄せて——)

1. 副詞語彙研究は重要である。

人間の言語表現に、修飾の活動がある。

この活動をぬきにしては、私どもは、個々の言語表現をまっとうすることができまい。——とやりたいぐらいに、私どもは、表現上、多く、修飾の行動に出る。まことに、表現上の修飾限定は、人間の、その時々¹の精神活動による、本然のいとなみであろう。

修飾は、表現者の深層の心理をあらわす。(それゆえ、私どもは、文学の研究においても、つねに、修飾一般を問題としなくてはならないのではないか。)

修飾法の要具として、特別に製作され用意されているのが副詞である。その複数の存立が、副詞語彙と見られる。

一小言語体系に、それでの副詞語彙が見られ、すなわち、その言語体系に必然の、修飾法特定要素の共生共存が見られる。この副詞語彙が、その言語体系の人々の言語生活の、深層心理の表現を、大いに可能にしている。

言語研究上、——人間の言語活動即精神活動の研究のうえで、副詞語彙の研究が、特定の重要性を持つことは明らかである。

1.1 方言副詞語彙の研究は重要である。

方言は、たがいに他を予定する対立的存在の一者々々である。その、個々の方言が、体系的存在の中に、方言副詞語彙を具有している。これが、当該方言下の人々の方言生活での、深層心理の表現に、大いに役だっている。方言副詞の精視をぬきにして、方言人たちの日々の表現活動——方言表現の生活——を見とることはできないであろう。

方言研究にとっても、方言副詞語彙の研究は、別して重要である。

方言は他に対立対応する存在であることから当然にくることであろう。A方言とB方言とでは、副詞語彙を、たがいに共通的にも所有しつつ、また、たがいに異なりを示しあっても、これを所有している。地域ごとに、方言圏がちがひ、——方言社会がちがひ、環境と生活状態とがちがひ、ひいては、人々の心の状況がちがえば、その心的生活の営みのちがひに相応して、修飾特定用具の副詞とその語彙とも、ちがひができてるのが当然であろう。となつて、方言——方の言——ごとに、その、表現の深層にかかわることのつよい副詞語彙の状況・相貌が、他方言のとの対比のもとで、注目されることになる。

方言と方言とのへだたりが大であれば、また、方言の存立する地域社会の、地域と地域とが隔絶していれば、双方での、実生活のへだたりの大きいのに比例して、おのおのでの心情のはたらかせかたも、たがいに大きく相違するはずである。結果として、方言副詞語彙上にも、双方での大差が見られることになる。

奥羽地方内の一方言について副詞語彙を見、つぎに、九州地方内の一方言について副詞語彙を見たとする。その差異のなんと大きいことか。(中国山陰の出雲の一小方言と、四国南部の土佐の一小方言とについて、双方の副詞語彙を対照してみても、私どもは、たちまち、一方にだけしかない諸副詞に遭遇する。)

そのはずであろう。風俗・習慣というようなものにも、すでに大小の差異が認められることである。

方言副詞語彙に関しては、かれこれを比較する研究の方向が、一つ、興味ぶかいものとされる。

2. 語彙記述(——今は方言副詞語彙の記述)のしごとは広い。

一方言の副詞語彙の記述のことを考えてみる。(——諸方言にわたる、副詞語彙の比較記述のことは、

一方の副詞語彙の記述の上で考えられることである。)

どこまでしごとをしたら、語彙記述はできたことになるのか。

はじめに、方言副詞語彙と言う、その語彙を問題にしておく。「語彙」と、言われるもの、観察されるもの、考えられとりあつかわれるもの、これは、本来、体系をなしたものだ、と考えられる。「語彙」の「彙」は、「分類し集める」などとされる<長沢規矩也氏編著『明解漢和辞典』新版>のものである。「語彙」という語を意識してつかううえは、人、だれしも、語彙そのものに、その体系的なまとまりを予定してかかる必要がある。私は、「語集」とは言われていない語彙そのものに、内面的なまとまりを認定する。「語彙」の語を、内面的なひきしまりを意味するものとも見ている。

ここに一体の語彙(という語のむらがり、群落、今は副詞語彙の群落)があるとするか。これは、その方言での方言人たちの生活の特性のうえに成立している、副詞単語の群落である。語彙がいちおう語集と見られたとしても、その語集は、ひとえに当方言社会の方言生活の特性のうえに存立するものである。そのような、一定条件下の、言いかえると特定状況下での語集は、その「集」の必然性ゆえに、語彙と見られる。

語彙には、はじめから、複数の諸語のむらがりの緊張がある。むらがり状態に、諸語間の、もっともしぜん緊張関係が認められる。ここでは、品詞別・語形別なども、二次的ではない。

語彙が生活の特性に密着するから、そのように、品詞別などの操作は、下次元の作業とされる。さて、この、生活特性に即応する語彙は、生活語彙と言われられるのが至当である。

語彙の概念は生活の概念をも内包すると言える。副詞の諸語がアツマッテ<彙>、語彙であるところには、生活が認められる。「彙」は生活事態を予想させる。この意味では、語彙について「生活語彙」を言うのは、修飾過剰でもある。語彙はおのずからにして生活語彙である。

2.1 語彙研究(→副詞語彙研究)は、分類からはじまる。

「彙」がすでに分類概念を含んでいる。精確な腑分けにも似た分類、これを、語彙はすでに待っている。方言副詞語彙の分類・分別は、どのように実践されるべきか。本冊には、室山敏昭氏を主宰者とする研究グループの、分類労作が掲出されている。(私自身は、『昭和日本語の方言』のシリーズの中で、私案の修成につとめてきている。かれこれに、多少の関連がある。)

語彙記述は分類にきわまる、分類が生命線であるとも言えよう。その分類は、「生活」を見る目によってなされるべきものである。——「生活」の原理とでも言いうるものが、ここにあるはずである。

土地の生活に直結した分類網を張ることが必要とされる。その点では、一小方言ごとに、分類項目(→細目まで)が考えられなくてはならない。が、また、諸方言のばあいを通じて、一般的にも、分類基準は立てることが可能である。と同時に、それは必要なことでもある。生活は地域的なものであるけれども、同時に、超地域的要素もまたそこにあるので、私どもは、分類項目に関しても、おのずから、その基本的体系を把握することができる。

分類上、いわゆる陳述副詞を立てることには、私は拘泥していない。叙述決定と言われることは、じつに広汎に見うるのではないか。「モーモー」という副詞は、牛の啼き声に關与し、馬の啼き声には關与しない。また「モーモー」は、ほとんど「啼く」ことを修飾して、「啼かない」ことを修飾することがまれである。つまり使用に傾向がある。「モーモー」は、早くも、先の叙述・叙述内容を指向する。

擬声語や擬態語の副詞については、どのような分類が可能であるか。生活分野に配属させるとなると、私どもは、分別にはねをおる。

2.2 分類のつきは排例である。

まず、分類された諸項目の排列がある。これは、大項目だけのばあいだと、さして造作もないことかもしれない。が、このばあいでは、それだけ、分類での生活表現ということが淡くなる。生活をくっきりと浮きたたせるようにするためには、分類を、大項目から小項目へと順次に細分化して行って、それらの諸

項目を、次元観よろしく、前後関係よろしく排列する必要がある。

つぎに、小項目一項内での語の排列が問題になる。この排列が、当該方言での副詞利用の生活の動態に即応した、生き生きとしたものでなくてはならないことは、言うまでもない。ここでは、本冊に言う“各地点の特有語彙”“共有語彙”の処置・接配が、重要な課題になる。

論を発展させて考えれば、こういうことも言える。なににしても、副詞だけの排列では、生活叙述としての副詞記述を、まっとうしていくことができない、と。生活の実相をふまえつつ、語（今は副詞）の排列を、しぜんで生きのよいものにしていこうとすると、私どもは、いきおい、関連する諸他の品詞をも、随所に登場させたい。——こういう点では、限って副詞語彙だけを記述していこうとすることが、そもそむりとも言える。語彙（生活語彙）の記述は、本来、総合的見地に立つべきものとも言える。

それにしても、最初から言うように、副詞は、私どもの表現生活での特定の要具である。これの群生するさまは、個々の言語集団ごとに、それとして観察して、意義のあることである。群生している副詞語彙を、生活の原理に立脚して記述していくことも、また、つとめてみるべき、重要な一記述方途とされる。

2.3 副詞一語々々の記述では、語アクセントの記述が重要である。

排列された各単語の副詞については、おのおのの語アクセントを記述することが、一つのだいじなしごとになる。

本冊、340の「イマダニ」は、筆者郷里の大三島北部集落だと、「イマダニ」の語アクセント成態になっている。同集落で、「イマダ」をかりに発言するとしたら、「イマダ」のアクセントで発言するが、副詞「イマダニ」は「イマダニ」である。この語アクセントであることによって、（——「イマダ」などとはおもむきを異にした調子のもになっていることによって）、「イマダニ」の語は、よく、副詞形としての定着ぶりを見せている。副詞「イマダニ」については、記述上、語アクセントを明示することが、必須と思われる。

355の「チカニ」（近日のうちに）も、語アクセントはおそらく「チカニ」ではないか。こういうアクセントをとって、副詞「チカニ」は、安定していることかと思われる。

356の「チコーニ」（近いうちに）も、私の郷里の方言では、「チコーニ」である。「近う なった」は「チコー ナッタ」と言うが、副詞「チコーニ」は、上の語アクセントである。

副詞には限らないことであるけれども、今は副詞について言うと、副詞の一語々々は、語アクセントにしめくられて形成されるものである。

語の、——語々々の副詞の、現実の方言生活の中でのつかわれさまを見ようとすれば、私どもは、語の副詞の、その副詞であることを証するアクセント成態を、ていねいにとりあげなくてはならない。

2.4 個々の副詞の内実の記述は、意味の、ではなく、意義の記述であろう。

私は、文の表現について「意味」を考えたい。現場について意味作用を認め、語の次元、すなわち非現場（表現前）では、語義（語の意義）を考定することにする。

パロール論の段階で、「意味」を考えることにし、とくにラングに即してものを言おうとする時は、「意義」を言うことにしたい。

「意味」と「意義」とは、副詞語彙研究の場席でも、区別してつかいたい。そうすることによって、この領域からしても、私どもは、意味論を（——広義にも狭義にも）、鮮明なものにしていくべきではないか。

2.5 副詞語彙記述の中での副詞の語のあつかいでは、用法の記述につくして、適切な文例をかかげることが、最上のこととされる。

語彙なるものの記述には、当為として、語に関する用例の設定が考えられる。

そもそも、語彙を見、語彙をとらえるということは、その語彙に属する語々の、生活に生きているよう

す、その生活の現場での意味作用発揮のさま（意味のさま）を、深く描くことを必然としたものではないか。——語彙は生活語彙であり、「語彙」がすでに生活を考えしめているからである。

語彙は、本来、用法記述・用例記述を要求しているものである。

一語の副詞に、そのじっさいのはたらきようをたずね、くまどりあざやかに、また、到り深く、それを描きつづす時、語記述が、よく語彙記述に高まる。こうして得られる語彙記述（今は副詞語彙記述）は、じつに、当該方言の有力な生活誌のひとつまになりうるものであろう。

2.6 語彙記述（→方言副詞語彙記述）は、しぜんに立体化される。

以上のような記述態度がつかぬかれれば、記述はしぜんに、もりあがりのよいものになろう。

語の排列でも、「おや項目」「子項目」といったようなはからいがなされるであろう。表記の体裁も、そこで、種々につけられるはずである。単純に一行に、諸語が陳列されるはずはない。語の排列が、早くも、語彙記述の立体性——動的な展開相——をものがたることになる。

3. 理想的な「方言副詞語彙」記述がしてみたい。

以上に、私は、「方言副詞語彙」記述（→語彙記述）の理想の追求を試みた。なるべく地道に、なすべきことを求めてきたつもりである。

これだけの要求を、今は自身に課して、瀬戸内海域内の一方言についての副詞語彙記述がしてみたい。

今回の研究グループの諸氏にも、そういう欲望が湧いているのではないか。六地点調査で、総「異なり語」数5100余をとりあげ得た人々である。この大数への接近を経験した諸氏は、今、副詞語彙の群生の事態に、研究眼を見はっているにちがいない。——その眼・心境からは、すぐにも、理想を求めての方言副詞語彙記述におもむくことができるのではないか。各自、自己の担当した調査地の方言に関してである。

理想的な副詞語彙記述と、“副詞語彙の実態についての分析的考察”とは、あい表裏するものであろう。

私は、今回の調査の計画されたころ、私的な立案をしてみた。

一地点を選び、その方言に、研究グループの全員がかかる。まず、協同で、徹底的に副詞をとりあげる。（これにいくらか近いことは、かつて、広島大学方言研究会でも試みたことがある。）——そのさい、

○ タテニャーヨコニャー カワイー。 “とてもとても” かわいい。

＜河田礼子氏調査 広島県山県郡豊平町都谷の方言の中のもの＞

というようなばあいも、また、こういう長形のものも、積極的に注意していく。調査を徹底させて、みんな、副詞語彙と言うべきものの、全生活語彙中での特定の存在のしかたを体験しあう。（実感を分かちあうというでもよい。）そこで、共同執筆の記述にかかる。——理想的な記述体系を追求しつつ。

こうしたら、相当時間ののちに、一方言に関する、好ましい方言副詞語彙記述が得られるのではないかと考えた。

事情がゆるせば、こういうしごとを、たとえば二地点、三地点について、グループ活動でやってみたい。

語彙調査（すなわち一方言に密着して）のいとなみは、研究者が自身の育った方言について気長くおこなうばあいか、研究グループが協同作業を一小方言に徹底させるばあいか、よくその美果をあげることができよう。

4. この段階で、方言副詞語彙の比較討究ができる。

理想的な方言副詞語彙記述が二地点以上にわたってしあげられた時、私どもは、語彙比較の確乎とした作業に進むことができる。

方言副詞語彙が、今回、見られるとおり、六地点にわたって、それぞれの所で、そうとうにとらえられたとするか。当事者は、（——また、他の研究者も）、結果の、方言副詞語彙の表覧をとって、語彙比較の研究を、どのようにか進めることができよう。それは、表覧の背後に、しかるべき語彙記述を想定して

のことである。

こういう点では、結果表示が、適切な分類体になっていることが望ましい。(小項目内にあっても)

4.1 “共有語彙” “特有語彙”の考えはたいせつである。

方言副詞語彙の比較となって、“共有語彙” “特有語彙”との考えはよく生きる。

二つ以上の語彙体系の、それとこれとの間がらでは、共有・特有が言える。

もっとも、ここで語彙と言うことには、多少の難がないでもない。一方言の方言副詞語彙に関しては、「語彙」の語は、その語彙全体をさす時にだけつかうのがよいかと思う。“共有・特有の語彙”は、語彙全体(語彙体系)の中の部分をなすものにはかならない。これは、全体の「語彙」に対しては、“共有の”副詞諸語、“特有の”副詞諸語とも呼んでみてよいものである。なによりも、共有・特有の諸語は、方言内での存在のしかたが、それらの内面的連帯を示す、統一的な存在状態にはなっていない。(—その方言副詞語彙の全体では、“共有”諸語・“特有”諸語の全体が、あい寄って、一大連帯の内面的統一を示しているけれども。)

いずれにもせよ、方言副詞語彙比較で、これこれの諸語は、他方言にも見られて共有的であるとか、これらの諸語は、他方言には見られにくいようで特有的であるとか言うことは、爾後の諸研究の一基礎として重要視される。

私どもは、瀬戸内海域内諸方言についての、方言副詞語彙の観察者として、ある一島の一小方言の副詞語彙に関しても、経験的に、これらは特有的だな、などと、推想することが、できなくもない。他との比較をぬきにして、おおざっぱながら、共有・特有が言えもする。このような感想判断も、わるくはない。これを、用心ぶかく利用していけば、本格的な副詞語彙比較を、一段と推進させることができもする。

4.2 並みの諸語、変わった諸語という副詞語彙分別ができもする。

共有か特有かは、分布を調査してみればよくわかることである。—今回の六島調査結果の表覧は、共有・特有を、直下に見せてくれている。

さて、共有のものには、並みの副詞、変わりばえのしない副詞が多い。特有のものには、変わった(ふうがわりな)副詞が多い。いずれも当然のことであろう。(念のため、例をあげておくと、共有度の高い「ナンニモ」など、べつに変わりばえはない。大島一地のものとして「老」の61「ムテンソクサイ」《全く》、「少」の62「ムテンソクニ」《全く》は、いかにも特有語然としている。)

上の事実ゆえに、共有・特有を考えることは、いっそもって有意義とされる。

ばあいによっては、瀬戸内海域で共有的であるものが、他地域に対しては特有的であるものもある。たとえば、「たくさん」の意の「エツト」など。これは、変わりばえのする副詞でもある。変わった(ふうがわりな)副詞諸語では、変わりばえの段階差と、分布の広狭差とが見られる。

じっさいには、その変わりぶりの度あいの認定が困難である。45「ナーニモ」(何にも)は並みの副詞で、46「ナニコソ」は変わった副詞、としてよいかどうか。やはり、分布に注意しなくてはならない。「ナニコソ」は、神島「老」・能美島「老」・長島「老」に見える。六地点だけの調査の結果では、瀬戸内海域をすぐに云々することができないけれども、ここに、「老」にだけ「ナニコソ」が見られるのは注意される。こういう点で、「ナニコソ」は、多少とも変わった副詞、とされるものに、なりつつあるかと、見られないこともない。私の郷里方言<大三島北部>では、「ナニグソ」が慣用形である。しかもこれは、私どもの少年時代でも、男性の長上のよくつかうものであった。「ナニグソ」は、もう、ふうがわりな副詞としておいてよいかと思う。おそらく、分布も小であろう。

副詞語彙中、並みの副詞を起点に、漸次、度あいを高めつつ、ふうがわりな副詞の継起・成立しているのは、注目にあたります。私の郷里方言でも、「メッタニ」があって、「メッタコッタ」「メッタコータ」がある。(本冊の資料の87, 88参照)しぜんのいきおいのもとでか、しだいに、ふうがわりな副詞が産みだされていく。これが、方言を異にしても、つまり二つ以上の諸方言のうえにも見わたされるのは、興味

が深い。副詞発想に、彼我にわたる共通性のあることが察せられる。

5. 方言副詞語彙の中の任意事実についての個別的研究、および、そういう事実についての、諸「方言副詞語彙」にわたっての比較研究がなされて然るべきことは、言うまでもない。

語彙研究と語研究とは、つねに両立することである。

『瀬戸内海言語図巻』にも、副詞の語の比較研究がかかげられている。

副詞、「常に」(共通語で言っ)などの諸語が、問題とされている。これらは、瀬戸内海域諸方言上での諸「方言副詞語彙」を勘案する立場で選出された。(——ここに、方言副詞語彙観があり、諸「方言副詞語彙」比較の想念があり、諸「方言副詞語彙」にわたって個々の副詞を見ていこうとする、副詞語の比較研究の心があった。)

以下に、比較研究の表現としての、副詞の言語地図(『瀬戸内海言語図巻』中のもの)二・三をとりあげ、瀬戸内海状況を見てみよう。

「常に」の図では、「ネンジャー」というのが、西の山口県から九州にかけての地域に見られる。(他にもすこし見えるが。)
「常に」を、特定化して受けとり、しかも「年中」という漢語の言いかたをしているのが、上記の地方である。——これは老年層でのことである。少年層図になると、「ネンジャー」が、九州と山口とにすこし残るだけになっている。いずれにしても、今、「ネンジャー」で、は内海域西方・西辺の分布が注目される。

「たくさん」(その一)の図では、「ヨーケー」が小豆島以西に見られて、西部域にややこれが多い。「ヨーケ」となると、これは全域に見られ、しかも、中部以東に、よりさかんである。二者はわずかに語態がちがうばかりのようであるが、分布のしかたは、上述のように、かなり相違している。方言風土としての土地がらというものがうかがわれよう。山口県下には「ヨーケー」が多い。九州の国東半島・豊前南部・姫島には、「ヨーキ」がある。九州の地で、「ケ」ではなく、「キ」と言っているのは注目される。「行ってみて」も、「イッチミチ」と言う所がらである。

「たくさん」(その二)の図では、「エット」の、周防東部から岡山県備中までの分布が見られる。だいたい中国系と言える分布がここにある。

「自然に」の図では、「ワガデニ」が、おもに愛媛県下に見え、周防の平群島・長島にもこれが見える。伊予と周防島嶼とのつながるこの分布相は、見のがしがたい。「ヒトリデニ」というのが、九州のほかの、ほぼ全域にある。九州には、「ヒトリデ」が分布している。(他にもこれがすこしあるが。)
「ニ」助詞の付いていない形が、ほかならぬ九州にあるのが注目される。

「突然に」の図でも、また、九州に、「ダマシニ」ではない「ダマシ」が見られる。「ダマシニ」は、まず内海西部に存在している。(「むりやりに」の図でも、大分県地方には、「ムリー」というのが存在している。)

「やっと」の図では、「エーヤット」「エーヤラヤット」が、内海中部以西の中国がわに分布している。「ヤレヤット」が、広島県下の大崎上島から広島湾島嶼にかけて分布している。周防大島の東部にもこれが見える。みな、中国系の分布である。

「あんじょう」(その一)の図では、「アンジョー」が、内海東部域に濃く分布している。その西にも、いくらかの分布がたどられはするものの、東部域の分布は、よく、この地方の方言地質を考えさせてくれる。

以上、各図とも、老年層のものである。

わずかの分布事例をとりあげたにすぎないが、上述するところによっても、瀬戸内海域での、副詞語の分布存立の傾向を、いくらかは明らかにし得ていよう。分布事例での、分布領域の中枢部や辺々に見られる島については、ことに、その副詞語彙の深部調査を試みる必要がある。

副詞語の、諸方言域にわたっての比較研究には、なお、地図化によらない方法もあって当然である。分

析の精深と、総合的的確とが、語単位の研究を良質のものにする。

6. 最後に、一般論としてつけそえたい。方言副詞語彙研究・方言副詞語研究にあたっては、一方で、方言副助詞にも注意したのがよい、と。

内海域には、備後地方に関しての、「備後パーパー」との言いぐさができている。備後地方では、「雨ばかり 降る。」でも、「アメ^{バー}フル。」と言う。(島づたいに伊予路へ渡るとする。「パー」は「パーイ」になっていく。) こういう「～パー」「～パーイ」は、副詞相当のはたらきをする。修飾の心理は、双方のばあい、同じである。

副助詞がはたらいたばあいの、現場の意味効果は、副詞がはたらいたばあいのそれに近い、とも言えよう。

方言世界では、ことに、副詞と副助詞とを、あわせて追求の対象にするのがよいのではないか。こうすることによって、動作などの修飾の、ゆたかな心情世界を、じゅぶん^に掘りおこすことができると思う。

(藤原 与一)